

25. 高度角膜混濁を有する白内障に超音波乳化吸引術が有効であった3症例

眼科学

森 春樹, 松島博之, 妹尾 正

【緒言】高度の角膜混濁を伴う白内障手術は、顕微鏡照明が角膜混濁部で散乱することにより、通常症例よりも視認性が悪くなる。そのため手術手技が難しく、術後成績の予測も難しい。今回、高度角膜混濁を有する3症例6眼に、術式を工夫して超音波乳化吸引術を行うことで良好な術後成績を得たので報告する。

【症例】症例1は50歳男性。フェノチアジン系の向精神薬内服の既往があり、それに起因する角膜混濁を認めた。術前視力はVd=(1.2), Vs=(1.2)であった。水晶体前囊染色、プレチヨップ法を用いて超音波乳化吸引術を施行し、術後視力はVd=(1.2p) Vs=(1.5)、角膜内皮細胞減少率は右眼7.0、左眼7.0%であった。

症例2は70歳女性。梅毒感染の既往があり、それに起因する角膜混濁を認めた。術前視力はVd=(0.2p), Vs=(0.05)であった。水晶体前囊染色、プレチヨップ法を用いて超音波乳化吸引術を施行し、シャンデリア照明も使用した。術後視力はVd=(0.4), Vs=(0.2p)、角膜内皮減少率は右眼6.8、左眼18.2%であった。

症例3は83歳女性。原因不明の角膜混濁を認めた。術前視力はVd=(0.2p), Vs=(0.2p)であった。水晶体前囊染色、シャンデリア照明、プレチヨップ法を用いて超音波乳化吸引術を施行し、必要に応じて顕微鏡照明を消灯して視認性を確保した。術後視力はVd=(0.8), Vs=(0.5)、角膜内皮細胞減少率は右眼48.0、左眼25.9%であった。

全症例で術後視力は改善した。また、自覚的にも視機能改善を認めた。

【結論】高度角膜混濁を伴う白内障症例でも、術式を工夫することで安全に超音波乳化吸引術を施行することが可能であった。ただし、視認性が悪く手術手技が難しく、手術時間も長くなることで、角膜内皮減少率が通常症例よりも高くなる傾向があり、手術施行時には十分に注意が必要である。

26. 熱帯病寄生虫病学講座が近年扱った検査・相談依頼の動向

熱帯病寄生虫病学

桐木雅史, 川合 覚, Marcello Otake Sato, 千種雄一

【目的】近年当講座に寄せられた寄生虫症および衛生動物などに関する相談・検査依頼事例から、当該分野の発生动向を知る。

【方法】2008～2017年度(平成20～29年度)の10年間の相談・検査依頼について、依頼機関、対象疾患・生物等を集計した。

【結果】該当する相談・検査依頼の件数は合計272件(18～39件/年)で、依頼者所属機関の内訳は獨協医科大学関連病院(大学病院, 埼玉医療センターおよび日光医療センター)から154件(56.6%)、その他の医療機関から94件(34.6%)、医療機関以外から24件(8.8%)であった。「その他の医療機関」の80.9%(76件)は栃木県外であった。依頼内容は寄生虫症が70.5%(44.0%～81.0%)、衛生動物が23.5%(8.7%～52.0%)、その他が6%(0～17.4%)であった。主な寄生虫症としては住血吸虫症(40例うち陽性4例)、消化管寄生条虫症(26例うち陽性15例)、赤痢アメーバ症(22例うち陽性6例)、マラリア(17例うち陽性6例)の他、鑑別疾患のひとつとして寄生虫症検査を希望する事例がみられた。衛生動物としてはマダニ類(24件)およびハエ類(12件)の相談・同定依頼が多く見られた。その他、臨床検査検体、家などの身近な環境または施設内で発見された“ムシ”および“ムシ様異物”の相談事例には、衛生害虫、ヒトに害がない生物の混入、無生物など、多様な事例が含まれていた。

【考察】最近10年間の寄生虫症の相談・検査依頼では、毎年1～6例の陽性が確認されたことから、本コンサルト事業は鑑別診断としての意義を持つことが示唆された。衛生動物では、多様な相談があった。病害性の有無にかかわらず、不審な“ムシ”の正体を明らかにすることは、依頼者の不安を取り除くためにも重要であると考えられる。

【結論】寄生虫症および衛生動物に関するコンサルトの需要は安定して存在している。今後、グローバル化に伴い予想される当該分野症例の量的・質的拡大にも対応できるよう準備を進めていきたい。